

学童保育と小学校との連携体制に関する研究

里 見 達 也*

I. はじめに

少子化や共働き家庭の増加などにより家庭や地域における児童をめぐる問題が複雑化・多様化してきたことに伴い、児童福祉制度の見直しが図られ、新たな子育て支援制度として、1991年に厚生省により「放課後児童対策事業」、1998年には「放課後児童健全育成事業」を実施してきた。これに伴い、学童保育が本格的に展開され、現在では2007年に文部科学省と厚生労働省の連携事業として「放課後子どもプラン」のもとに推進されている。

小林（2006）は、学童保育を「保護者が労働等により昼間家庭にいない小学校に就学しているおおむね10歳未満の児童に対し、授業の終了後に児童厚生施設等を利用して適切な遊び及び生活の場を提供するところ」と述べている。

しかしながら現在、少子化のため同年齢が少ないことから、異年齢集団での遊びを設定するものの、子ども同士のつながりが薄く、子ども集団としての遊びが発展しない現状が見受けられる。

さらに、放課後の生活の拠点としての機能が拡充し、利用時間の延長や緊急一時的に利用できる体制に加え、障害児への利用の配慮や対象年齢の延長など相談に応じた支援も求められている。

一方、斎藤（2001）は、「相談支援とは子どもの成長によって、医療機関や福祉機関、療育機関など他機関との連携が求められ、そのためには連携のシステム作りが重要である」と述べている。

今日では、特別支援教育コーディネーターが中心に相談支援を行っているが、金子（2009）によれば、「他機関との連絡調整に止まらず、それぞれの立場や思いを尊重しながら子どもを中心に据えた協働をコーディネートしていく必要がある」と述べている。

また、三田地（2006）は、問題解決や合意するプロセスでの連携の話し合いを活性化させるための手段として「①準備の段階、②グループワークの段階、③フォローアップの段階のファシリテーション」を提唱している。

本研究は、学童保育と小学校との連携体制を通して、連携の活性化に向けたファシリテーションの有効性について探っていくものとする。

* 帝京学園短期大学

Ⅱ. 方法

1. 相談支援の内容

(1) 相談者

Y県内の学童クラブ指導員3名

(2) 相談期間

2008年3月～現在

(3) 相談内容

学童クラブに在籍しているAくんへのかかわり方及び小学校への連携調整

- ・ Aくんへの対応（暴力的態度・ことば遣いなど）
- ・ Aくんと家族との関係改善（両親の関係など）
- ・ Aくんの学校での様子など情報交換を希望（学校をはじめ、関係諸機関との連携を図りたい）

(4) Aくんの概要

①学童クラブ指導員より聞き取り調査

- ・ Y県内の市立小学校4年生学級に在籍
- ・ 両親と姉弟の5人家族
- ・ 保育園時より物忘れが多く、自分勝手など「気になる子」であった
- ・ 小学1年時より、友だちをたたくなど暴力的であった
- ・ 絵本は、ほとんど絵しか見ていない
- ・ ひらがなはだいたい書けているが、カタカナや漢字はあやふやである
- ・ 「宿題はないよ」など、うそをつくことが多い
- ・ 怒られている時は落ち込んでいる様子が見られるものの、すぐににこにこして友だちとあそびにいつてしまうことが多い
- ・ 服やかばん、遊具などは出しっぱなしが多い
- ・ 母親はAくんに対して、あいさつやことばづかいには注意をするものの、行動面にはあまり関心がない様子である
- ・ いたずらをしていると、妹から「お父さんに言うよ」と言われ、やめることがある

②Aくんの様子観察

- ・ 小3男子との輪ゴム鉄砲あそびでは、人に向けて飛ばそうとしていた
- ・ 「あんた、だれ？」と当初警戒する様子がみられた
- ・ くすぐりなどスキンシップを好む
- ・ 簡単な指示はよく理解して行動に移せる
- ・ 年下にはやさしく声かけする様子がみられた
- ・ 当初は友だち感覚のことばづかいだったが、「ありがとうございます」とていねいなことばづかいになってきた

③Aくんと面談

- ・ゲームは得意である
- ・本読みは苦手だが、漢字はできれば読めるようになりたい

2. 相談経過

- ①メールでの相談を受信【2008. 3. 11】
- ②電話、メールにて相談内容及び訪問日時を確認【2008. 3. 11】
- ③学童クラブへ訪問（Aくんの情報収集や実態把握図の作成）…2回
【2008. 4. 15（19：00～22：30）、4. 28（17：00～23：00）計2回】
- ④在籍している小学校へ訪問（Aくんの学校での様子を観察）…1回
【2008. 5. 15（9：30～11：00）】
- ⑤学童クラブ指導員と小学校担任教師との情報交換会を開催…1回
【2008. 5. 26（19：30～20：30）】
- ⑥学童クラブへ訪問（経過観察）…3回
【2008. 6. 13（16：00～19：30）、7. 17（16：00～19：30）、2009. 3. 6（16：00～19：30）】

3. 分析方法

今回の相談経過は、大きく「話し合い」と「連携」の2つに分けることができる。一つは「Aくんについての方針の設定」における話し合い、もう一つは「小学校との情報交換会」における連携である。今回は二つ目の「小学校との情報交換会」の会議経過について、Aくんの学童保育で見られる様子を1つずつタックシールに記し、それぞれのタックシールの相関関係を図式化した「実態把握図」を作成をもとに、次の3つの視点で整理し、①準備の段階、②グループワークの段階、③フォローアップの段階ファシリテーションの有効性について考察する。

Ⅲ. 結果

1. 「実態把握図」の作成と方針の確認

小学校等の関係機関との連携を図る上で、まず、学童保育でのAくんの様子を再度確認し、学童保育での方針を明確にしておく必要がある。学童クラブ指導員はAくんについて気づいたことを1枚のタックシールに1つずつ記入する作業を課題とした。その際、具体的に「～ができる段階」まで観察した上でタックシールに記入することとした。

タックシールを記入した後、類似した内容のタックシールをまとめてそれぞれに共通した見出しをつけることを繰り返し、まとまったタックシール群との相関関係を矢印等で図式化したものが図1である。

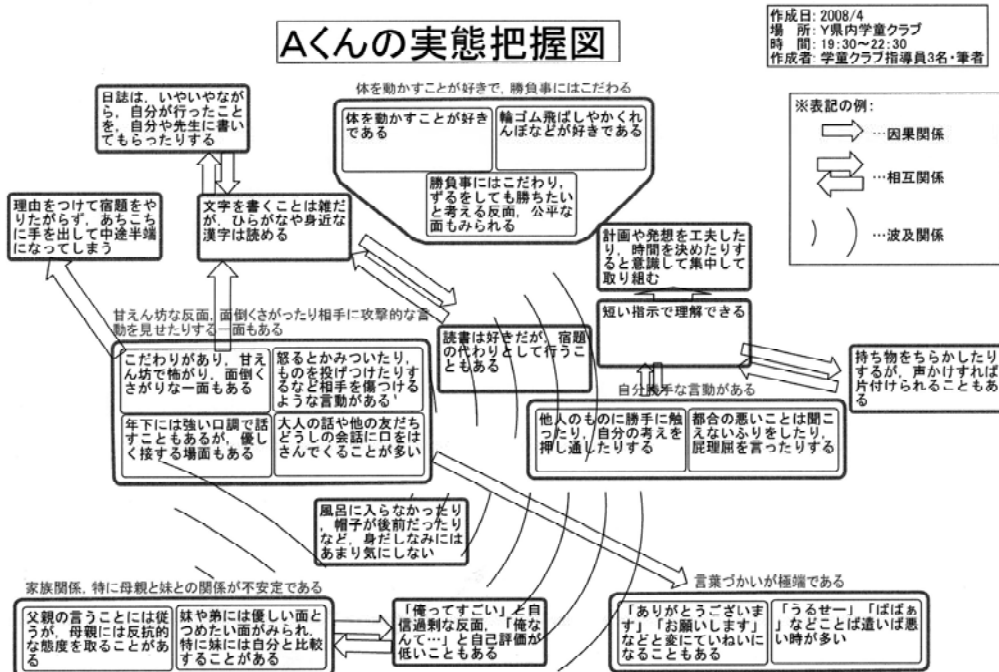


図1 Aくんの実態把握図

図1から、Aくんは特に母親との関係など家庭環境が不安定なため、時として甘えん坊な面や面倒くさがったり相手に攻撃的な言動を見せたりする一面が現れやすいと推測した。「家族との関係」が根底にあることを押さえながら学童保育の場面でまず支援できることとしては、「面倒くさがったり相手に攻撃的な言動を見せたりする一面」への支援だと思われる。そこで、Aくんの行動を改めて観察してみると、学童クラブ指導員の指示が「学童クラブにきたら、まず靴を脱いで、次にロッカーに帽子とカバンを置くんだよ」といった複数の指示に対して、面倒くさがりな様子がみられた。これは、一連の指示に対してどのように行動したらよいか分からなくなっているのではないかと予測した。そのため、「行動チェックリストを活用しながら、短い指示で、順序立てて指導」していくことを共通の方針として確認した。

さらに、学童クラブ指導員は学童保育でみられる気になる一面が、学校では一体どのような様子なのかを知りたいとの要望が上がってきたため、学校見学を要請することにした。その際に、学童保育と学校生活との方針の共有化を図ることを前提に学校との連携を要請し、話し合いをもちたい旨を伝えることにした。

2. 小学校見学について

小学校見学では、まず、小学4年から6年までの合同の「音楽」の様子を授業参観した。Aくんの様子は、落ち着いて学習に取り組んでおり、歌も覚えている個所は元気よく歌う

様子がみられた。教師が「遠き山」の歌い方について発問したところ「静かに」や「夏の夜」をイメージして歌うなど積極的に答える場面がみられた。その反面、「すみやかに」の意味についてはあいまいに言葉を濁す様子がみられた。

その後の学校長や担任教師との話の中では、小学4年になって担任が女性から男性に替わったことで、だいぶ落ちついてきていること、特に最近では目立つ行動はないとのことであった。しかし、情報交換という意味では連携は必要との認識から、「情報交換会」を学童保育と小学校との間で開催することになった。

3. 小学校との情報交換会について

学童クラブ指導員3名と小学校校長と担任教師の2名との間で情報交換会を開催した。まず、Aくんの実態把握図を見ながら、家庭環境がAくんの行動に影響を与えている背景を参加者全員で確認した。

次に、学童保育での様子について学童クラブ指導員が報告を行った。

○昨年度までの様子：

小学1年生時…

(Aくんについて)

- ・乱暴な面がみられ、友だちとのトラブルもあった。

(母親について)

- ・迎えにきたらすぐ家に連れて帰ろうする様子がみられた。

(学校の担任について)

- ・学校の担任は女性教師だと聞いている。

小学2年生時…

(Aくんについて)

- ・学童保育での活動の流れが分かってきたようで、少しずつではあるが落ち着いてきた。

(母親について)

- ・少しずつではあるが、Aくんの学童での様子を聞くようになってきた。

(学校の担任について)

- ・学校の担任は持ち上がりと聞いている。

小学3年生時…

(Aくんについて)

- ・乱暴な面は減少したが、自分勝手な面がみられ、母親に対しても命令口調になるなど、家庭環境が気になってきた。

- ・所要物の管理が難しい。

(母親について)

- ・親子のやりとりを、学童保育の場で解決しようとしていた。

- ・学童保育ではあまり話をしなくなってきた。

(学校の担任について)

- ・学校では担任が替わり、ベテランの女性教師だと聞いている。

○現在の状況：

(Aくんについて)

- ・宿題については、友だちと野球をして遊んでいて、打順が回ってくる間に宿題と思われる「音読」を行う様子がみられた。

- ・宿題はかけ算九九の「1の段」の複唱だと言うことがある。
- ・「連絡帳は学校または家に忘れてきたので宿題が分からない」と言うことがある。
- ・「父親に言うよ」というと静かになるときが合った。

(母親について)

- ・迎えにくるのがだんだん遅くなってきている。

(学校の担任について)

- ・学校では担任が替わり男性教師だと聞いている。

さらに、学校での様子について担任教諭及び学校長から次のような報告があった。

○クラスでの様子：

- ・学校でも言い逃れをすることがあるが、危険な事柄以外は無理にしかることはしていない。
- ・父親は怖いようである。
- ・宿題は、忘れたら理由を問わず休み時間に行うよう指導している。

○学校生活全般での様子：

- ・よく体を動かし、落ち着いて学校生活を送っていると思われる。
- ・面白い発想を思いつき、発言している。

これまでの報告から、(1) Aくんへの対応、(2) 母親への対応、(3) 学童クラブと学校との連携、の3点に分けて検討を行った。その結果、次のようにまとまった。

(1) Aくんへの対応

- ・約束事をつか二つに絞って本人とともに決定し、「行動チェックシート」等を作成しながら、できたらシールを貼るなどして確認していく。
- ・Aくんと教師双方とも同意の上、次に進むようにする。

(2) 母親への対応

- ・家庭での宿題の時間帯を決めて行うように働きかけてみる。
- ・母親がストレスを発散できる場所を一緒に考えていく。

(3) 学童クラブと学校との連携について

- ・学校に、学童クラブ用の配布物等を入れるボックスを設置する。
- ・学童クラブや学校双方とも、気づいたことはこまめに連絡をとり合い、お互い行き来できるような関係を構築していく。

4. 実践

情報交換会を受けて、日々の学童保育の中で、学童クラブ指導員はAくんと約束事を一緒に決め、本人との同意のもと、次の活動に進むよう心がけるようにした。さらに、学童クラブや学校がお互いに気づいたことを連絡し合う体制づくりを双方で模索し始めた。そのため、今後の情報交換会は必要に応じて随時召集する方向となった。

IV. 考察

上記の「小学校との情報交換会」までの経緯を次の3つの視点で整理し、ファシリテーションの有効性について考察する。

1. 準備の段階

まず、学童保育でのAくんの様子を確認し、学童保育での方針を明確にする上で、「実態把握図」を作成していくことは、話し合いの課題がよりはっきり目に見える形で示され、小学校等の関係機関との連携をする上で共通した視点で話し合いができる題材となろう。さらに、Aくんが戸惑うことがないように、共通したかかわり方を求めていくことで、小学校との連携を手始めに、特別支援教育コーディネーターをはじめ、関係諸機関とも話し合う機会が設定できる可能性が広がることが想定される。

三田地（2006）は、中野（2003）の「Why（なぜ）」、「Who（誰が誰と）」、「Whom（誰を）」、「When（いつ）」、「Where（どこ）」、「What（何を）」、「How（どのように）」、「How much（いくらで）」の「企画の6W2H」の項目を参考に加筆して「会議の準備段階で考慮すべき項目－企画の6W2H－」の表を作成した。この項目に従って今回の情報交換会を整理してみる（表1参照）。

表1 「会議の準備段階で考慮すべき項目－企画の6W2H－」

企画の6W2H	会議の場合	今回の情報交換会
1. Why（なぜ）	会議の目的	Aくんの学校での様子について情報収集するとともに共通した支援を検討する
2. Who（誰が誰と）	会議の主催者	筆者
3. Whom（誰を）	会議への参加者	学童クラブ（指導員）3名 小学校（校長・担任教師）2名
4. When（いつ）	会議の日程	平成20年5月
5. Where（どこ）	会議の場所	学童クラブ
6. What（何を）	会議の内容	「実態把握図」をもとに、学童保育・学校双方の情報交換
7. How（どのように）	手法	話し合い形式
8. How much（いくらで）	参加費	無料

※三田地（2006）を参考に加筆

このことから、今回の情報交換会は、学童クラブ・学校双方のAくんの様子について情報交換しながら、共通した支援を検討する上で、「実態把握図」が重要な部分を占めたことが再確認できた。さらに、このような情報交換会を拡大して、その他の関係機関とも共

通した支援をテーマに話し合う機会が設定できる可能性が見えてきた。

2. グループワークの段階

三田地（2006）は、話し合いには、「効果的に時間を使って、何らかの成果物（アウトプット）が出せることで、複数の人が集まった意味がある」ものととらえている。そのために、「現状を把握する＝子どもの実態把握」から、「目指す理想の姿を見定める＝半年後、1年後などになってほしい理想の姿」を想定し、「現状と理想の姿のギャップを埋める手立てを考える＝個別プラン作成」（共通した支援の方法）が必要であると述べている。

今回の情報交換会は、Aくんの現状を把握する「実態把握図」を共通の題材にして、学童保育と学校双方でこの1年間取り組む課題について話し合い、Aくんへの共通した支援や連携を模索する機会としても適切であったと考えられる。

さらに、三田地（2006）は、「話し合い観察チェック表」をもとに、話し合いの過程を再度見直すことで、この話し合いの意義や今後の話し合いの方向性が明確になると述べている。そこで、今回の話し合いを「話し合い観察チェック表」に整理して話し合いの過程を見直してみることにする（表2参照）。

「話し合い観察チェック表」を通してしてみると、情報交換会の雰囲気は、参加者全員が情報収集し、その多くは共通認識のもとAくんへかかわろうとする姿勢が感じられ、積極的な情報交換ができたと考えられる。しかし、実際の支援の方法については具体性を欠き、はっきりとした形がみえていないのが現状であろう。今回の情報交換会は、お互いの情報収集には大いに役立ったが、実際に共通した支援の方法については不明瞭であったと思われる。そのため、次回以降のフォローアップが必要になってきたことが確認できる。

3. フォローアップの段階

三田地（2006）は、計画したプランがきっちり実行していくためには、「プラン実施開始1か月後、3か月後、6か月後という間隔、あるいは毎月という頻度」で進捗状況を報告するというルールを決めることが大切と述べている。

今後の情報交換会は、必要に応じて随時召集することにしたが、ほとんど開いていないのが現状である。学童クラブへの巡回も、月1回程度訪問することになっていたが、他の相談件数が増加する中で、Aくんが長期休業時にのみ学童保育を利用する状態となり、ほとんど巡回できずに今日に至っている。

その結果、長期休業時に利用している状態の中で、一度は終息に向かっていた相手に対する攻撃的な言動が高学年となり体力も増したため、女性の指導員では解決できず、さらに悪化している現状が最近報告された。

つまり、「必要に応じて随時召集する」体制は、結果的にフォローアップをしていないことと同じになってしまった。さらに、情報交換会で具体的な支援方法を明確にできなかったため、Aくんの行動に対応しきれず悪化したものと考えられる。このように、定期的な

巡回体制は、フォローアップ体制のルール化とともに大切であることを再認識させられた。

表2 話し合い観察チェック表

開催日	平成20年4月	予定時刻	19：30～（1時間程度）
参加者人数・構成	学童クラブ指導員3名 小学校（校長・担任教師） 筆者	実際に要した時間	19：30～20：30
司会	筆者	記録係	筆者
そもそも何のための会議 なのか（目的）	対象児の学校での様子に ついて情報収集するとと もに共通した支援を検討 する	その日の成果物（会議で 生み出す物）が明確にさ れていたか？（目標）	対象児への共通した支援方法
話し合いのプロセス		よかった点・改善点	
19：30	・全員がそろう ・「実態把握図」をもとに、対象 児の課題を再確認	・開始予定時刻には参加者全員が集合していた ・「実態把握図」があることで、関連性が目に見える形で分かり、 共通した児童像が話し合いができた	
19：40	・学童保育での様子を報告	・小学1年生の時の様子から現在までの学童保育での様子が分かっ た	
19：50	・学校での様子を報告	・学校生活全般からクラスの様子などが知れてよかった	
20：00	・検討事項を話し合う ①対象児への対応 ②母親への対応 ③学童保育と学校との連携 ・必要に応じて情報交換会を開 催することで一致	・項目ごとに検討事項を整理できてよかった ・「行動チェックリスト」の活用は理解できるが具体的に活動を絞 り込む方法が分かりにくかった ・母親への対応は、ストレスを解消する具体的な方法が見つから ず、明日以降のかかわり方がはっきりしなかった ・お互いに行き来できる関係づくりはよいことだが、配布物の共 有化以外は具体的に何をするのかまで話し合うことができなかった ・必要度が明確でなかったため、どのような場合に開催するのか はっきりしていない	
20：30	・解散		
成果物	実態把握図		
場の雰囲気	良い・悪い・わからない（その理由は？） ・参加者全員が情報収集する機会と考えて参加していた		
自分の気持ち	満足・不満足・わからない（その理由は？） ・参加者の多くは共通認識で対象児とかかわろうと姿勢が感じられた		
総合評価	（ 60 /100点）（その理由は？） ・共通認識をもととする姿勢は感じられたが、具体的な支援方法まで話が至らなかった		

V. まとめ

今回は「小学校との情報交換会」の会議を通して、連携の活性化に向けたファシリテーションの有効性について探ってきた。

「準備の段階」では、「実態把握図」など視覚的な資料があることで、話し合いの課題

がよりはっきり見えてくることが分かった。また、小学校等の関係機関との連携をする上でも共通した視点で話し合いができる題材となろう。さらに「企画の6W2H」の項目に基づいて整理することで、情報交換会の目的や必要性が再認識され、この情報交換会を足掛かりに、その他の関係機関とも共通した支援について話し合う機会へ発展できると思われる。

「グループワークの段階」では、Aくんの現状を把握する「実態把握図」を共通の題材にして、学童保育と学校双方でこの1年間取り組む課題について話し合い、Aくんへの共通した支援や連携を模索する機会となり、有効であった。しかしながら、実際の支援の方法については具体性を欠き、はっきりとした形がみえなかったため、現状でのお互いの情報収集に止まり、実際に共通した支援の方法については不明瞭であった。

「フォローアップの段階」では、定期的に巡回を行い、フォローアップする体制をルール化しておく必要があったが、「必要に応じて随時召集」する形をとったため、結果として情報交換会は形骸化してしまい、問題を悪化させる要因になったと考えられ、反省に堪えない。

これらのことから、ファシリテーションの3つの視点は、連携体制を考える上で、連携の真の意味や手順の方法を再確認する点においても、また、よりよい連携の方向性を見出す点においても有効であると思われる。

今後は、「小学校以外の関係機関との連携」について、ファシリテーションの有効性について探っていくことにする。

文献

- 1) 金子健（2009）コーディネーターの現状と課題．特別支援教育研究，617，2-4.
- 2) 小林美代子（2006）序によせて—子どもの居場所としての児童館・学童保育は、いま（児童館，学童保育の現状と課題；子どもの総合的な学校外・地域施設の量的質的充足を！）．小木美代子・須之内玲子・立柳聡（編著）児童館・学童保育の施設と職員—多機能，複合化する施設と職員の専門性．萌文社．11-22.
- 3) 斎藤佐和（2001）成熟した社会の役割—子どもを支え，家族を支える相談支援システムの形成—．特別支援教育，4，2-3.
- 4) 中野民夫（2003）ファシリテーション革命．岩波書店．
- 5) 保育法令研究会（2008）保育小六法，中央法規．
- 6) 三田地真実（2006）連携を促進するためのファシリテーション．特別支援教育研究，590，16-17.